

構文の選好性の相違から見る 分裂構文、非分裂構文と「ノダ」構文

Differences in Preference between
the Cleft Construction, Non-cleft Construction, and “noda” Construction

楊 竹楠†
YANG Zhunan

Abstract This study is based on the investigation of the Chinese-Japanese Bilingual Corpus. My investigation shows that in Chinese and Japanese language there are different constructions even though they are used to express the same situation. In Chinese, the cleft construction “...de shi...” is not always translated into the Japanese cleft construction “...nowa...da”, but sometimes is translated as the “noda” construction or non-cleft construction. The difference in preference depends on the differences in focused elements, word order, and subjectivity between the two languages.

1. はじめに

人間同士がコミュニケーションをしている際、情報のやり取りにおいて、重要な部分がどこであるかを決定し、そこに焦点 (focus) を当てる必要がある。その時、話し手が聞き手に一番伝えたい部分を「強調」すると考えられる。言語学では、「強調」という言葉の出現頻度も低くなく、中国語学においても、強調構文が研究対象として多く取り上げられている (董 2003¹⁾, 石 2005²⁾, 成&邓 2016³⁾)。しかしながら、「強調」が表す範囲が非常にあいまいであるとも言われ、イントネーションの変化、副詞による取り立て、語を繰り返すなどのトートロジー的修辞表現なども、全て強調と呼ばれるため、あまりにも厳密な用語ではない (周 2002⁴⁾, 刘 2006⁵⁾)。

一方、他言語の研究を見てみると、英語では文法的に強調がはっきりわかる形となって現れる文型があり、それは「分裂文(cleft sentence)」と呼ばれている (福地 1985⁶⁾)。分裂文のように、情報の焦点を取り立てる時、ある要素を特定の構文に入れて形式化し、情報の焦点をより明確

にする現象が見られる。このような構文は日本語と中国語にも同様に存在する。

- (1) 昨日来たのは李さんだ。
(2) 昨天 来的 是 小李。
昨日 来る 名詞化辞 コピュラ 李さん

しかし、(1) と (2) のように中国語と日本語は構造上対応するにもかかわらず、中国語の“...的是...”構文に対応する日本語の構文は、「...のは...だ」構文だけではなく、「ノダ」構文になる場合もある。

- (2') 昨日李さんが来たのだ。

本研究は、中日対訳コーパス¹⁾のデータを通じて、同じ場面において、中国語の“...的是...”分裂構文と日本語の「...のは...だ」分裂構文が文法上どちらでも許容される文を中心に、訳文における分裂構文、非分裂構文と「ノダ」構文の選好性の相違を分析する。

† 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

2. 日中両言語の分裂構文の類似性

中国語の“…的是…”分裂構文と日本語の「…のは…だ」分裂構文は、英語の分裂構文と類似し、両者とも分裂構文に特徴的な話題継続 (Declerck1985⁷⁾)という談話機能を持つことが知られている。大堀・遠藤 (2012)⁸⁾は、中国語の“…的是…”構文を挙げ、二つの談話機能について分析している。一つは、“…的是…”構文に後続する文は、ある命題が続くことであり、(3)の“很挣钱(稼ぎがいい)”は“做体育明星的经理人(有名な運動選手のマネージャー)”の話があつてからの話題である。

(3) F1: 我 想 的 是 做 那个什么
私 思う 名詞化辞 コピュラ やる その

体育明星 的 经理人。
スポーツスター の マネージャー
(私が思うのは、有名な運動選手のマネージャーじゃ (をやる))
F2: 对啊, (うん)
そう
F1: 很 挣钱。(すごく稼ぎがいい)
非常に 儲ける
(大堀・遠藤 2012: 40)

二つ目は、話し手の情緒的な評価を先に伝え、続いて語るべき内容の枠を設定するという。つまり、(4)のように、談話の冒頭に“可恨(憎たらしい)”という感情を先に伝えて、その後の文脈は「憎たらしい」の具体例をいくつか挙げてから、最後にまたその気持ちを帰結するというような表現である。

(4) F: 其实 最 可恨 的 就 是— 我
实际 最も 憎たらしい 名詞化辞 副詞 コピュラ 私

觉得 最 可恨 的 就 是—
思う 最も 憎たらしい 名詞化辞 副詞 コピュラ

因为 它 整个 XX 人 多, 地方 就 那么
ので その 全て (不明) 人 多い 場所 だけ その

大, 空间 就 显得 很小。
大きさ 空間 副詞 見える 小さい

(実際、一番憎たらしいのは、一番憎たらしいと思うのは、ある XX 人が多くて、場所はたった

それだけしかなくて、スペースは小さくなって
いつているから)

M: 对 (うん)
正解
(中略、Fは憎たらしい点をいくつか挙げる)
F: 这个 就 容易 引起 人 的 心理 的 不满。
これ 副詞 簡単 起こす 人 の 心理 の 不満
(人の不満を起こしやすいよ)
(大堀・遠藤 2012:41, クロスは筆者による)

一方、中国語と日本語の分裂構文は類似している構造を持ち、さらに談話機能も共通点が存在しているものの、実際のコーパス用例では対応していないケースも多く見られた。以下では、中日対訳コーパスのデータ分析に基づき、中国語の“…的是…”構文の談話機能を中心に、日本語の「…のは…だ」構文と対照しながら、分裂構文の選好性の相違を考察する。

3. コーパスデータと分析

同じ発話場面において、日中両言語とも分裂構文は使用可能であるが、別の形に訳される場合がある。楊・堀江 (2016)⁹⁾は中日対訳コーパスの11作品から分裂構文「…のは…だ」と“…的是…”を抽出し、それぞれの訳文は分裂構文か分裂構文かについて調べた。本稿はさらに対訳文のタイプを分類し、表1に示す。

表 1 「…のは…だ」と“…的是…”の対応関係

対応関係		日本語原文 → 中国語対訳文	中国語原文 →日本語対 訳文	
原文		…のは…だ		…的是…
数量		339 (100%)		225(100%)
対 訳 文	対応する場合	37 (10.9%)		119(52.9%)
	分裂構文が使用できない場合	302 (89.1%)	241 (71.1%)	なし
	分裂構文は使用可能であるが、別の形式になる場合		61 (18.0%)	106 (47.1%)
			…是…的 9	ノダ 50
			非分裂 構文 52	非分裂構文 56

また、両言語の分裂構文の焦点部に生起する要素を調べた結果、日本語の「...のは...だ」の焦点部には主語が生起する場合が多く、中国語訳では“...的是...”分裂構文ではなく、非分裂構文が用いられる傾向が見られた。一方、中国語原文では“...的是...”の焦点部には主語より目的語のほうが多く現れ、その場合日本語訳では「...のは...だ」構文ではなく、非分裂構文を用いて訳される傾向があるとわかった。

- (5) a. 玄関に出たのは、慈念である。受持ち教師の
来訪は慈念の顔色をかえた。しかし、教師の
来訪を和尚に告げないわけにゆかない。

(『雁の寺』)

- b. 慈念 出来 接待, 看到 教 自己 的 教師
人名 出る 接待 見える 教える自分 の 教師

来訪, 慈念 的 脸色 马上 变了。 但是,
来訪 人名 の 顔色 すぐ 変わった かし

老师 来訪 的 事 又 不能不 报告 师父。
教師 来訪 の こと 副詞 二重否定 報告 師匠

(《雁寺》)

(慈念が出てきた。以下略)

(aは原文、bは訳文、下線部は筆者による。以下同)

- (5') 出来 接待 的 是 慈念。
出てくる 接待 名詞化辞 コピュラ 人名

(5a)では「...のは...だ」分裂構文の焦点は主語の「慈念」という人であり、直訳すると(5')のような分裂構文になるが、訳文は“...的是...”構文ではなく、(5b)のような非分裂構文が用いられている。それに対して、中国語原文では“...的是...”の焦点部には目的語のほうが多く現れ(6a)、その場合日本語訳では「...のは...だ」構文(6')ではなく、非分裂構文を用いて訳されている傾向がある(6b)。

- (6) a. 谁 让 你 用 的 是 圆
誰 使役 あなた 使う 名詞化辞 コピュラ 丸い

筷子。要 用 方筷子, 也 接住 啦。
箸 もし 使う 四角い箸 も 載 語気助詞
(《丹凤眼》)

- b. 丸いお箸を使うからだめなのよ。四角いお箸だ
ったらちゃんと載ったんだけど。(『鳳凰の眼』)

- (6') 使うのは丸いお箸だからだめなのよ、(後略)

以下、中国語と日本語の両言語が、同じ発話場面にお

いて異なる形式の構文を選択する要因を分析する。

3・1 焦点化要素の相違

中国語の“...的是...”構文と日本語の「...のは...だ」構文に続く文は、焦点部について語り継がれるという話題を継続・展開する機能を持っている(劉 2010¹⁰⁾) が、焦点が主語か目的語かによって展開のあり方が異なる。砂川(2005)¹¹⁾は、主題展開²は焦点部の主題性に関係があり、主語は目的語より主題性のスケールが高いと述べている。

- (7) 文の格成分や主題成分によって指示対象の主題性が予測できる。すなわち、指示対象が示される文の成分に応じて次のような主題性のスケールが認められる。指示対象の主題性は、左の成分に表現されたときほど高いことが予想される。

主題 > 主格 > 対格 > その他

(砂川 2005: 83)

砂川(2005)の分析によると、(8)の焦点部は主語の「父」であり、それに後続する内容は父についての記述である。一方(9)の焦点部は目的語の「塩釜」であるが、それに後続する内容は塩釜に関する内容ではない。すなわち、焦点化される内容については展開していないといえる。

- (8) 私とアメリカを結びつけたのは、父である。彼は早稲田の政経を卒業後、【以下、父についての記述が続く】

(砂川 2005: 249)

- (9) その人が乗り込んできたのは、確かに塩釜だったと思う。【以下、その人についての記述が続く】

(砂川 2005: 250)

さらに、砂川(2005)において、上述したスケール性はGivón(1995)¹²⁾が提唱している文の成分の主題性についてのスケールと一致していると述べている。すなわち、「指示対象が文のどの成分に表現されるかによって指示対象の予測のしやすきに差が生じ、主題としての安定性に異なりが生じることを指摘し、文の成分を主題性の高いものから順に並べた次のようなスケールになる」ということである。

- (10) a. 意味役割: 主格 > 与格 > 対格 > 所格 > 道具格 > その他

- b. 文法役割: 主語 > 直接目的語 > 間接目的語
(Givón 1995: 46)

中国語の“...的是...”構文は目的語の焦点化に多く使われ、話題の継続・展開のために用いられることが相対的に少ない構文といえる。それゆえ、話題の継続・展開はしていない、目的語が焦点化される文を日本語に訳す際に、話題の継続・展開の機能を顕著に有する日本語の「...のは...だ」構文が選択される必要はないと言える。

なお、中国語の“...的是...”構文において、焦点化要素には目的語が多く現れるということについて、以下の例を通じて考察する。

- (11) a. “积善堂” 的 孩子 穿 的 是 袍子、
地名 の 子供 着る コピュラ 名詞化辞 長衣

马褂, 后脑勺 留着 小辮, 戴着 金银
上着 頭のうしろ 止める 弁髪 つける 金銀

串串 的 脖鎖; 这个孩子 穿着 一身 白, (略)
量詞 の 首飾り この子 着る 全身 白
(《金光大道》)

- b. 「積善堂」のせがれは、袷の長衣に短い上着を着こみ、頭のうしろを弁髪にし、金色、銀色に輝く魔除けの首飾りをかけていたが、この少年は上も下も真白で、(後略) (『輝ける道』)

- (12) a. 虽然 她 带来 的 是
ただし 彼女 持ってくる コピュラ 名詞化辞

不好的 消息, 然而 觉慧 却 很 欣慰,
悪い 報せ しかし 人名 でも とても 慰める

他 觉得 现在 又 有 一个 母亲 了。
彼 思う 今 また いる 一人 母親 テンス
(《家》)

- b. 彼女は不穏な報せを伝えていったのだけれど、
觉慧には嬉しかった。今もまた一人の母がある
と感じたからである。 (『家』)

(11a) と (12a) は中国語の“...的是...”構文が用いられる用例であり、焦点化される要素は文の目的語になっている。後続の文をみれば、どちらもその目的語について話を継続して展開していない。このことから前述した目的語が話題の継続・展開がしにくいという説との一致が見える。(11a) では、分裂構文において焦点化の位置に述語「着る」の対象、すなわち服装を提示しており、続きの文ではその服装ではなく、主語になる「子供」についての話題が続く。同じく (12a) では、述語「伝える」の対象「報せ」先に提示したが、その後は話し手自身の感想を述べることになる。(11b) と (12b) は対訳コーパスにおける日本語訳であるが、文法的には日本語の「...

のは...だ」分裂構文を用いて訳せるものの、いずれも分裂構文は用いられず、非分裂構文になっている。

3・2 分裂構文と非分裂構文の語順の相違

ここで日中両言語の分裂構文と非分裂構文の語順に注目したい。SOV が基本語順である日本語は、分裂構文を作る時、O の順番は V の後の位置になる。

- (13) 花子がケーキを作った。

S O V

- (14) 花子が作ったのはケーキだ。

S V O

日本語の分裂構文の語順と語用論の関係について、砂川 (2005) は次のように説明している。

- (15) 分裂文も文の構成要素を基本語順と異なった語順で表現するものである。その点は後置文と同様なのであるが、分裂文の場合に規範的な文法から逸脱していると感じる人はいないと思う。それは、分裂文が「～は～が」「～が～だ」というコピュラ文の構造を持ち、文法にかなった形となっているからである。このように、分裂文は、述語を文末に置かなければならないという構文的な要請と、基本語順と異なる表現をするという談話語用論的な要請の、どちらも満たす形で表現できる構文として存在しているわけである。

(砂川 2005: 164)

それに対して、中国語の“...的是...”分裂構文において、“...的是...”によって文の前提と焦点が分かれるが、SVO が基本語順となる中国語は、V と O の順番が特に変わっていない。前の (11) と (12) を例として、分裂構文を非分裂構文に変換すれば以下ようになる。

- (11') a. 分裂構文: 穿 的 是 袍子
着る 名詞化辞 コピュラ 長衣
V O

(着ているのは長衣だ)

- b. 非分裂構文: 穿着 袍子
着ている 長衣
V O
(長衣を着ている)

- (12') a. 分裂構文:

她 带来 的 是 不好的 消息
彼女 持ってくる 名詞化辞 コピュラ 悪い 報せ
S V O
(彼女が伝えていったのは不穏な報せだった)

- b. 非分裂構文：她 帶來了 不好的 消息
 彼女 持つ テンス 悪い 報せ
 S V O
 (彼女が不穏な報せを伝えていった)

(11')(12')のように、中国語の“...的是...”分裂構文において、目的語が焦点化される場合、日本語の「...のは...だ」分裂構文と異なり、語順が変わっていない。したがって、語順の変化による強調の意味も薄くなると言っても過言ではない。その上、話題を継続・展開させず、そのまま話題を終了させる場合も見られたため、目的語が焦点化される中国語の“...的是...”分裂構文には、ほかの談話機能を持つことも考えられる。大堀・遠藤 (2012) は、分裂構文は「話し手の情緒的な評価を先に伝え、続いて語るべき内容の枠を設定するという」機能を持っていると論じ、類似している考えを森 (2008)¹³⁾ も述べている。具体的には、分裂構文は「これから話者が自分の意見や感想を述べるということを伝える「前置きの前置き」(Schegloff, 1980¹⁴⁾)として用いられ、その後、背景となる必要情報を伝えたいという話者の私見を述べるという話の流れを可能にしている」ということである。中国語の“...的是...”分裂構文においても、後続する文脈もこのような「私事語り」の内容が多く見られた。

4. 分裂構文と「ノダ」構文

第3節は、分裂構文と非分裂構文の選好性について分析を行った。次に、日本語訳文に現れる「ノダ」構文を中心考察する。

4・1 日本語の「ノダ」構文と分裂構文のつながり

伊藤 (2010)¹⁵⁾は分裂構文と「ノダ」構文の間には、意味的なつながりが認められ、両構文ともあることを前提として、その答えを主張していると述べた。例えば、以下の文は「太郎が何かを注文した」ということを前提としたものである。これは日本語の「...のは...だ」分裂構文と「ノダ」構文の共通点といえる。

- (16) a. 太郎はカレーを注文した。 (非分裂構文)
 b. 太郎が注文したのはカレーだ。 (「...のは...だ」分裂構文)
 c. 太郎はカレーを注文したのだ。 (「ノダ」構文)
 (伊藤 2001: 33, 括弧の内容は筆者による)

益岡 (1991)¹⁶⁾は、分裂構文が叙述様式判断型の説明文「ノダ」と密接に関係していることを指摘している。叙述様式判断型の「ノダ」文について、次のような例を挙

げている。

- (17) 選手達は泣いていない。
 (18) 選手達は泣いているのではない。(益岡 1991: 64)

(17) は「選手達は泣いている」という事態が存在しないことを表している。それと異なり、(18) ではある事態の存在を認めた上で、その事態が「泣いている」と捉えるべきではないことを表している。つまり、(17) を「存在判断型」と呼ばれていることに対し、(18) を「叙述様式判断型」と呼ばれている。一方、分裂文の場合は次のようである (19)。

- (19) 太郎がプレゼントをしたのは花子にだ。
 (20) 太郎は花子にプレゼントをしたのだ。
 (益岡 1991: 152)

益岡 (1991) は (20) を叙述様式判断型の文とし、「太郎が誰かにプレゼントをした」という事態の存在を認めた上で、その事態の叙述として「太郎は花子にプレゼントをした」と表現していると説明した。さらに、「太郎が誰かにプレゼントをした」といった事態を課題として設定し、その課題に対する答えは「花子にプレゼントをしたということなのだ」と述べた。すなわち、(21a) のような文に言い換えられ、さらに主文の部分を焦点だけ残して省略すると、(21b) の文になる。

- (21) a. 太郎が誰かにプレゼントをしたかと言うと、花子にプレゼントをしたということなのだ。
 ↓
 b. 太郎が誰かにプレゼントをしたのかと言うと、花子にだ。

(益岡 1991: 150)

このように、「...のは...だ」分裂構文は、前提となる部分に基づいて設定される課題に対する回答を与えるという意味から、「ノダ」構文とつながっていることが分かった。

4・2 日本語の「ノダ」構文と分裂構文の対応関係

次に、分裂構文と日本語の「ノダ」構文の関係をコーパスの実際の用例を通じて分析する。中日対訳コーパスでは“...的是...”構文は (22) と (23) のように、日本語に訳す場合、「...のは...だ」分裂構文に訳することができるものの、「ノダ」構文に訳されている場合も見られる。

- (22) a. 我 嫁 的 是 个 什 么 人
私 嫁 ぐ 名 詞 化 辞 コ ピ ュ ラ 一 人 ど ん な 人

呢, 他 怎 么 和 常 人 不 一 样? 打 老 早
語 気 助 詞 彼 な ぜ と 普 通 人 違 う ず い ぶ ん 前

静 宜 心 中 便 出 現 了 这 疑 团。
人 名 心 中 的 心 中 瞬 間 に 現 れ た こ の 疑 問
(《活動変人形》)
(一体嫁いだのは何て人かしら。後略)

- b. 一体何て人に嫁いだのかしら。普通の人となぜ
違 っ た の? 早 く も 静 宜 の 心 に 疑 問 が 頭 を も た げ
て いた。 (『応報』)

- (23) a. 任 何 一 句 话 都 无 法 表 达 我 此 刻 的
い づ れ 一 言 も で き な い 表 現 私 今 の

心 情 。 牛 牛 啊, 你 们 怎 么 会 知 道
気 持 ち 人 名 感 嘆 詞 あ な た た ち な ぜ 可 能 知 る

我 要 说 的 是 什 么 呢?
私 たい 言 っ 名 詞 化 辞 コ ピ ュ ラ 何 語 気 助 詞
(《轮椅上的梦》)
(前略、私は話したいのは何かどうわかってもら
えるか)

- b. どんな言葉も感情の前では色あせる。今の私の
感 情 を 表 す 言 葉 が あ る だ ろ う か? ど う 話 し た ら
私 の 気 持 ち を わ か っ て も ら え る の か?
(『車椅子の上の夢』)

(22)(23) は、いずれも日本語の「...のは...だ」分裂構文に訳すことが可能であるが、実際には分裂構文が使用

されず、「ノダ」構文が用いられている。堀江・パルデシ (2009) ¹⁷⁾では、日本語は「ノダ」のような文末表現が発達しており、聞き手に対する共感、注意喚起などにかかわる間主観的意味をコード化していると述べている。

- (24) 日本語、韓国語などの言語においては、「話し手 (聞き手)」はもとより、「聞き手 (読み手)」への注意、配慮が文法構造に反映する現象が顕著的であり、SOV という語順とも関連して「聞き手めあて」の文法形式が文末に配置されることが知られている。 (堀江・パルデシ 2009: 170)

以上挙げられた用例は強調したい部分を焦点として取り立てる話し手の主観性だけでなく、聞き手に対する問いかけ・示威などの働きかけも表している。この場合、「难道 (まさか)」などの反問や感嘆の副詞と共に起る文や、明らかに相手を問いかけるような表現が使われている。したがって、それを日本語に訳す際には、聞き手に配慮する間主観性を持つ「ノダ文」が選好される傾向がある。

「ノダ」構文に対応する意味や機能において類似した特性を示す構文は、世界の諸言語にも存在する (大竹 2009) ¹⁸⁾とされている。中国語では、「...是...的」構文、すなわち本研究で扱っているもう一つの分裂構文が挙げられる。「ノダ」構文の意味や特徴に類する中国語の“...是...的”構文は、「事実を叙述し、原因を説明する」などの機能を持っている。楊 (2017) ¹⁹⁾は、中国語の“...是...的”と“...是...的”両分裂構文の機能領域を考察した結果、“...是...的”は日本語の「ノダ」構文と類似し、「コト」を焦点化する機能を持ち、“...是...的”構文と機能上相互に補完しあっていることを明らかにした (図 1)。

これを踏まえ、本稿で検討した日中両言語の分裂構文の特徴を加え、日本語の「ノダ」構文と分裂構文の関係を図 2 (次のページ) のような関係に示すことができる。

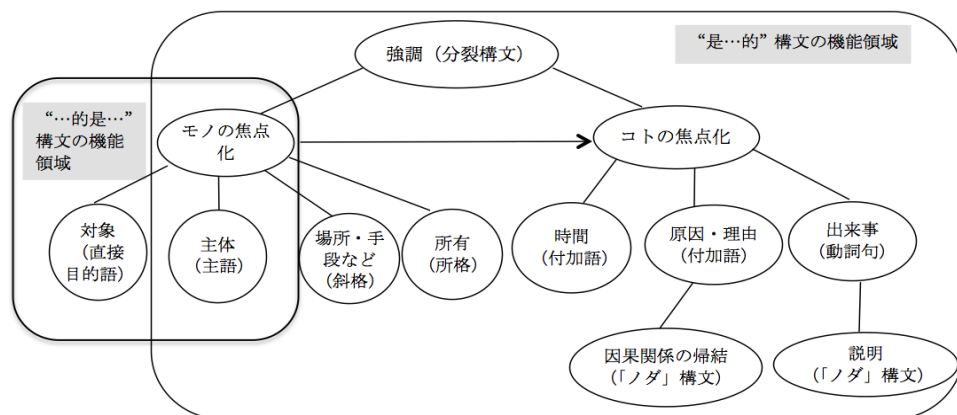


図 1 中国語の両分裂構文の機能領域 (cf. 楊 2017)

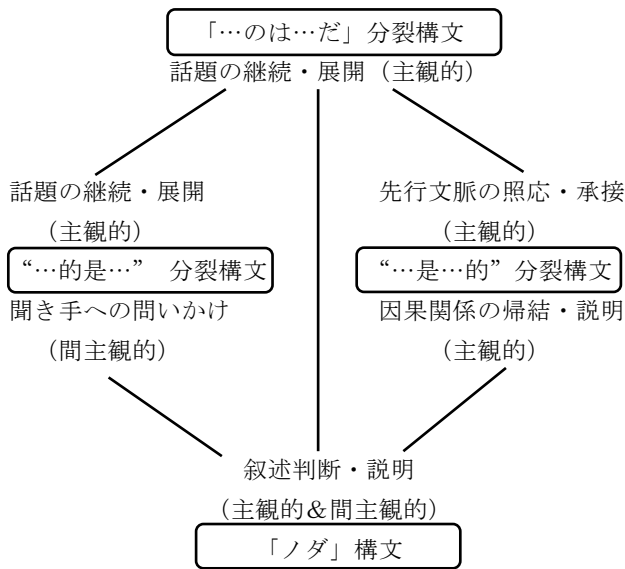


図2 分裂構文と「ノダ」構文の関係

5. まとめ

本稿は中日対訳コーパスの用例を調べ、日中両言語における分裂構文の選好傾向を考察した。両言語とも分裂構文が使用可能な場合、実際に使用頻度の差があり、分裂構文が使用されないことも見られた。中国語の“…的是…”構文は目的語の焦点化に多く使用され、その場合SVOの語順に変更はないため、話題の継続・展開という談話機能より、「私事語り」を導入する機能が見られた。また、日本語では分裂構文以外に、文末の「ノダ」構文が聞き手への問いかけなどの役割を果たしていることを提示し、分裂構文と「ノダ」構文が意味と機能上のつながりがあることを示した。

注

- 1 中日対訳コーパスは日本語原文コーパスと中国語の対訳文、中国語原文コーパスと日本語の対訳文が含まれ、合計 2013.78 万字のコーパスである。当該コーパスには、日本語原文コーパスは小説などの作品が 36 作収録され、本研究は収録順に、中国語と日本語それぞれ最初の 11 作品を使っている。
- 2 本稿では、Declerck(1984) が提示した「話題継続」と砂川(2005) が論じた「主題展開」という二つ用語を同じ談話機能とみなし、以下、先行研究の引用以外、「話題の継続・展開」という用語に統一する。

参考文献

- 1) 董秀芳: 无标记焦点和有标记焦点的确定原则, 汉语学习, 2(1), 10-16, 2003.

- 2) 石毓智: 论判断、焦点、强调与对比之关系——“是”的语法功能和使用条件, 语言研究, 25(4), 43-53, 2005.
- 3) 成祖堰, 邓云华: 汉英强调句焦点成分的优先序列, 汉语学报, 3, 88-94, 2016.
- 4) 周小兵: 对外汉语教学中的副词研究, 中国社会科学出版社, 北京, 2002.
- 5) 刘丹青: 焦点(强调成分)的调查研究框架, 东方语言学, 上海教育出版社, 上海, 2006.
- 6) 福地肇: 談話の構造, pp.138-139, 大修館書店, 東京, 1985.
- 7) Declerck, Renaat: Studies on Copula Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts, Leuven University Press, Leuven, 1988.
- 8) 大堀壽夫・遠藤智子: 構文的意味とは何か, 澤田治美(編), ひつじ意味論講座 2 構文と意味, ひつじ書房, 東京, 31-48, 2012.
- 9) 楊竹楠, 堀江薫: 中日両言語における分裂構文選択の差異—談話機能の観点から, 日本語用論学会第 18 回大会論文集, 11, 227-230, 2016.
- 10) 劉洋: 中国語“A 的是 B”構文の使用に関する一考察: 日本語の『A のは B だ』分裂文と対照しながら, 中国語学, 257, 108-126, 2010.
- 11) 砂川有里子: 文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究, くろしお出版, 東京, 1995.
- 12) Givón, Talmy: Functionalism and Grammar, p.46, John Benjamins Publishing, Amsterdam/Philadelphia, 1995.
- 13) 森純子: 会話分析を通しての「分裂文」再考察: 「私事語り」導入の「～のは」節, 言語社会科学, 10(2), 29-41, 2008.
- 14) Schegloff, Emanuel A. "Preliminaries to preliminaries: "Can I ask you a question?", Sociological inquiry 50(3-4), 104-152, 1980.
- 15) 伊藤晃: 談話と構文, p.33, 株式会社大学教育出版, 岡山, 2010.
- 16) 益岡隆志: モダリティの文法, くろしお出版, 東京, 1991.
- 17) 堀江薫, プラシャント・パルデン: 言語のタイポロジー, p.170, 研究社, 東京, 2009.
- 18) 大竹芳夫: 「(の)だ」に対応する英語の構文, pp.306-307, くろしお出版, 東京, 2009.
- 19) 楊竹楠: 分裂可能性階層から見る中国語の分裂構文の機能領域—日本語との対照を通じて—, KLS Proceedings, 37, 217-228, 2017.

(受理 平成 31 年 3 月 9 日)